

六、無力と他力

いつのころからか、他力という言葉が世間から誤られて、それが一つの嘲笑的な眼をもつて見られ、嫌悪すべきものであるかにとられてしまった。したがって他力ということは、生きいきとした青年や、世の中に現役として働いている者などには用事のないことで、愚痴な老人や、弱い女や、感傷的な人たちの弄ぶつまらないもののごとくに考えられてしまった。

これはいったいどこに重大な原因があるのであろうか。

一草の芽をきる、一木の成長する、いやしくも天地宇宙の事々物々一として他力ならぬものはない。大自然のすべては、一塵といえども、他力的存在である。

しかしながら、それは客観の世界の説明にすぎない。

他力本願の場合の他力は、説明ではなくて、体験であり、自覚である。外の問題の説明ではなくて、内なる、自覚の風光である。

仏とは死人のことであるととられたり、往生とは、困難することであると使われたりするほどの誤解で、他力とは無力のこと、他人にすがって、ずるくことを成就しようとするこくらくらいに、政治家や新聞人らによつて使われはじめて、今や全国的な通用語になろうとする。歎かわしいことである。

門外漢が間違えるようになったのは、その原因が、門の外にあったのではなくて、門の内、すなわち浄土真宗の僧侶の伝導の仕方と、その教えを聞きたいわゆる同行の生活の中にあつたのだ。そしてそれは悲しいことでも否定することはできない。

「手を出すに非ず、足を運ぶに非ず、悪いを治すに非ず、……動かされないそのまんまを、抱いてかかえて蓮華の御座へ……」といった式の明治この方のお説教が、僧俗ともに今の言葉どおりの他力にあらずして、無力の墮地獄道へつれて行つたのである。われらは今一度新しく正しく聖人の浄土真宗を見返さなくてはならない。すなわち、念仏の世界を自力と他力と判釈せられたが、さらに他力念仏が、他力と無力に決判せられなくてはならない。

「他力と云ふは、如来の本願力なり。」とは千古不滅の聖人の断言であつた。

いずれの時、いずれの場合にも「力」は肯定せられなくてはならない。しかし、その力がどこより発したか、何によつて発したか、いかなる相によつて働いたかが問題である。

如来の本願は力である。衆生の煩惱の上にはたらく力である。

金剛不壞の力である。しかしその力は、遠く、常住にして、清浄なる涅槃の内奥より発し、尽十方無碍光如来のすべてとなり、清浄、真実なる智慧、一切衆生を救わずばとの大慈悲を内容とし、本質とせる力である。

この紅き真実それ自体たる如来の本願力、すなわち如来の大生命を恵まれて救われる。これよりほかに他力はあり得ない。

「あの人は人生に破れた人だ」と言えば、必ず、富を失ったとか、地位が無くなったとか、不幸、禍が重なったとか、人間らしい幸福を味わわないで世を終える人のことである。

つくづく考えて見ると、私なども、その一人である。今の世には宗教の世界においてすら、栄華を誇る道があるのだから。

しかし不平を言つては相済まない。われらの慈父聖人は、私どもよりもっと人生に破れた方であつたのだから。

聖人の世界が「無力」に見えるのも無理はない。

しかし、真の力ということは今一度、はつきり検討しなくてはならない。

世間の人は、人間的幸福や、名誉や、地位や、財産を生命とする。はなはだしい人間は計画的に英雄になろうとさえする。そして力とはじつにかくのごとき通俗的成功や、事業や、権力や、金力や、支配力などをさして言われる。

もしそうしたものが力であるならば、念仏の中に動く如来の本願力は力ではない。かかる力はむしろ無明の業力として否定する。

念仏者の生命は念仏である。

2

一本の美しい花は、力によつて芽生え、力によつて成長し、力によつて咲いたのだ。

しかしこの花を、幼児の一撃によつて斬ることができる。そしてそれもまた力である。

ここに人生には、二つの力が存在することがわかる。

源頼朝が持っていた力と、親鸞聖人が持っていた力と。

もし、釈尊や親鸞聖人などが持っていた力を侮蔑し無視して、頼朝が持っていた力を發揮することのみをもつて人間を教養すれば、社会は人間の努力に反比例して暗黒を深めてゆく。

信心なき世界は墮落であり、

念仏なき世界は暗黒である。

われらは徹頭徹尾、華に咲く力をのみ真実であると深信し、念仏の華に咲かなくてはならない。

われらの団は、人間の一生、この華に咲くためにのみあることを信じて生きる者の集団でありたい。

有名になるを要せず。

幾十万人の集団なりなどと大法螺を吹いて世を欺くを要せず。

社会的表面に躍ることも必要ならず。

天才を要せず、才物を要せず、秀才を要せず、門閥を要せず、その他一切を要せず。ただ無用の用として、社会の底に根強く根を下ろして、はつきり如来の本願念仏に生きる人を要とす。

幾千万べん帰命無量寿如来といわゆるお勤めするも、ただこれ習慣と申しわけ、説教するも、金の集まりや人の集まりのみ気にかかり、何を見ても何を聞いても、念仏の助縁ともならず、習慣仏教、形式仏教、お役所仏教、役者仏教、他力にあらざして無力である。無力仏教とは、本願力のぬぎになつたこと。百害あつて一利なし。

如来のもの言わぬところ、もの言うは人間の醜悪なる煩惱のみである。

同胞よ。ともに手をとつて、聖人の教えの前に絶対に合掌して、無名の華として咲かん。

無力と他力、他力の世界には喜びがある。自分を自分で生きる喜びがある。真に如来に生きる者は真に自分に生きる。

迷うた同士の人間の毀誉褒貶よりも、もつと如来の勅命の方が、絶対である。如来本願の大信の中にのみ真の喜びがある。どんなに言いわけしてみたところで、無力の世界は空虚である。

3

本県にも隣県にも、中央にも地方にも、汚職収賄事件が続いておこる。みな今は時めく力の人たちだ。他力本願などは、頭から聞いたこともない人たちだ。もしあの大の英雄たちが力の人であるならば、念仏の人は力の人ではない。一生涯、総理大臣の椅子と言つたようなものを追うて生きていることなどは、わが釈尊は、妄想顛倒の迷路をたどる悪人と断定した。その人たちの存在が日本を人類を、少しでも美しくしたであろうか。

釈尊、龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、法然、親鸞……

念仏は、真人格から、真人格へ流れる命であつた。星霜二千年、その間に僅か八人。

真の力はただここにあつたのだ。

われらは、今、生を人生に享けて、この大聖たちの足跡を慕い、念仏一つに生きようと言ふのだ。二兔を追う者は一兔を得ず。梅と桜と両手に楽しまんとすることなかれ。釈尊をはじめ、七高僧、親鸞聖人、一人として、かかる人があつたであろうか。みなみな、一度は世を捨てて、不滅の領域に直入し、そして静かに人生に随順した人だ。

「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろづのことみなもて、そらごとたはごまことあることなきにただ念仏のみぞまことにておはします。」

幾千度、拝読しても、味わいきれぬ聖言である。

「念仏のみぞまこと」なるがごとく見せて、念仏ならぬものをまこととし、生命として生きる念仏者は、一人として聖人の弟子ではあり得ない。

信は力である、しかしいつしかに我慢が力となり、

念仏は他力である、しかしいつしかに他力は無力となり、

本願は絶対の救済である、しかしいつしかに、救いはあさましい自分と如来とのなれあいとなり、

念仏は絶対善である、しかしいつしかに、絶対善は凡夫相対の自力念仏となり、

如来大悲は善悪ともに摂取する、しかし、いつしかに大悲が反倫理の弁解に持ち出される。

一切自力相対の迷妄を、如来大行の大鉄槌によつて粉碎された端的に、無碍の大信海が顕現する。無碍の道味、真の力は、ただ、如来本願の裏うちにのみあり得る。